

日本体育図書館協議会 第6回（2016年度）研修会

2017.1.20（於 日本体育大学 中会議室）

自校史教育と学修支援
ーアーカイブズの立場からー

西山 伸（京都大学大学文書館）

はじめに

二つの限定

- ・ 教室での実践
- ・ はたして「自校史教育」なのか

I 前提としての大学文書館

2000年11月設置 ※前史としての『京都大学百年史』編纂

- ・ 保存期間が満了となった京都大学法人文書の受入
- ・ 京都大学関係者からの資料の寄贈・寄託
- ・ 上記資料の整理・公開（閲覧・展示）
- ・ 上記資料を用いた大学史・アーカイブズ学などの研究・教育

II 講義「京都大学の歴史」

1 概要

- ① 科目名：京都大学の歴史
- ② 担当者：西山
- ③ 種別：全学共通科目
- ④ 開講期：前期のみ
- ⑤ 受講者：183名（2016年度）
- ⑥ 教科書：使用しない
- ⑦ 評価：毎回の講義終了後に提出するコメント＋学期末レポート

[別表] 登録者学部・学年別人数(2016年度)

	総合人間	文	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	計
1回生	8	1	7	0	77	0	1	0	4	11	109
2回生	0	3	2	0	11	1	0	1	10	5	33
3回生	0	3	4	1	3	0	0	0	4	0	15
4回生以上	1	4	0	0	3	5	0	0	8	5	26
計	9	11	13	1	94	6	1	1	26	21	183

2 構成

(1) 内容

全体を通して [資料1]

- 留意点 ① 網羅的・通史的ではなくトピック的なテーマ設定
 ② 他大学関係の資料も積極的に提示
 ③ 戦前・戦中と戦後のバランス

講義の例 (「出征する学生たち ー学徒出陣(2)ー) [資料2]

受講生のコメント [資料3]

(2) レポート

2016年度

以下の二つの課題のうち、どちらか一つを選んで論述すること。

- 1 大学（特にその研究面）と社会との関係について、次の言葉をすべて使用して論述せよ。
 京都学派 高度経済成長 大学紛争
- 2 1933年の滝川事件について、以下の三点に触れながら論述せよ。
 - ① 文部省側と京大法学部側との対立点は何だったのか。
 - ② なぜ京大法学部は、自らの行動について「滝川個人の擁護ではない」と声明する必要があったのか。
 - ③ 滝川事件がその後の日本の大学に及ぼした影響は何か。

3 意図

「教養教育」として

自らの眼でものを見て、自らの頭でものごとを考える

それぞれの専門の立場から 資料を重視

素材としての「京都大学」 ※「京都大学」である必然性はない？

大学・大学生について考える素材の提示

大学・大学生について考える＝自らについて考えること

トピック的なテーマ設定～大学・大学生のあり方が問われた時期

同世代の若者がそれぞれの時代に何を考え、どう行動したか（京大に限らず）

全体についてのコメント [資料4]

※学生のもつ既成の概念をこわすこと

Ⅲ 「自校（史）教育」について

定義：「大学の理念、目的、制度、沿革、人物、教育・研究などの現況等、自校に関わる特性や現状や課題を教育内容、教育題材として実施する授業科目」（大川一毅氏）

「大学との一体感」「〇〇大学に対するアイデンティティの確立」「本学構成員としての意識」という言説

→ 評価になじむのか

「〇〇大学」でなければならないのか

「まず自らの周囲を」は、学問・勉強の基本 → この観点を生かした教育を

おわりに

[資料1]

2016年度「京都大学の歴史」構成

第1回 ガイダンス

第2回 京大キャンパスの歴史

- 1 キャンパスの変遷
- 2 吉田という地
- 3 創立期の京大キャンパスと京都

補 楠と時計台

第3回 京都帝国大学の創立 —「自由の学風」の源流—

- 1 帝国大学
- 2 京都帝国大学の創立
- 3 創立期の京大

第4回 滝川事件 —何が問題だったのか—

- 1 発端
- 2 法学部の主張と大学自治
- 3 休職発令から総辞職表明へ
- 4 周囲の動き
- 5 法学部の分裂
- 6 事件の背景
- 7 意義とその後

第5回 戦争と大学 —「協力」の諸相—

- 1 戦時下の研究
 - (1) 理科系
 - (2) 文科系
- 2 知識人のあり方、言論への責任

第6回 出征する学生たち —「学徒出陣」(1)—

- 1 制度
- 2 実態

第7回 出征する学生たち —「学徒出陣」(2)—

- 3 学徒兵たちの記録から
 - (1) 戦争認識と在学徴集猶予停止
 - (2) 運命の受容
 - (3) 死と向き合って
 - (4) 学徒兵の多様性

第8回 敗戦と新制京都大学の発足

- 1 敗戦直後の京大
- 2 戦後教育改革

第9回 占領期の学生たち

- 1 敗戦直後の学生
- 2 1950年前後の学生運動
- 3 天皇事件

第10回 高度経済成長期の学生と大学

- 1 武装闘争から学生運動の分裂まで
- 2 高度成長と大学・学生

第11回 大学紛争とその背景（1）

- 1 特徴
- 2 時期区分
- 3 経過
 - (1) 慶応・早稲田・日大
 - (2) 東大
 - (3) 京大
- 4 要因

第12回 大学紛争とその背景（2）

- 5 紛争をめぐる様々な言説
 - (1) 大学への疑問
 - (2) 不信、告発として
 - (3) 情念の問題として
 - (4) 運動の自己目的化、権威化
 - (5) 「一般学生」
 - (6) セクトとの関係
 - (7) 管理者側
 - (8) 周囲から
- 6 紛争の底流
- 7 紛争の影響

第13回 講義の終了にあたって

- 1 補足として
- 2 講義が目指したもの

[資料2]

全学共通科目「京都大学の歴史」

出征する学生たち — 「学徒出陣」 — (2)

2016.5.30 西山

はじめに

3 学徒兵たちの記録から

(1) 戦争認識と在学徴集猶予停止

不利な戦局 (ガダルカナル、山本五十六戦死、アッツ島) [史料1]

徴集猶予停止 [史料2、3]

海軍軍人の講演 「悲惨な状態」 [史料4]

講義への出席 [史料5]

(2) 運命の受容

世代としての運命 [史料6、7]

戦うことの意味付け 具体的なもののため [史料8、9]

「主体的役割人間」 [史料10、参考1、史料11、12、13]

与えられた社会的・物理的条件において自らの役割を「主体的に」選択し、そのなか

で自らの能力を最大限に発揮することをためらわない、という心性を有した人間

与えられた任務の遂行、「同胞意識」 [史料14]

(3) 死と向き合っ

様々な葛藤 [史料15、16]

触れ合わない [史料17]

(4) 学徒兵の多様性

中国戦線 [史料18、19]

学徒兵への「制裁」、徴集時期・軍隊内部の実態の問題 [史料20]

「下」から見た学徒兵 [史料21]

おわりに

残された記録 → 事実・実態の解明 (多様性)

自分に誠実に生きる (生きようとする) ことの意味 「受け身」の認識

資料一覧

- 史料 1 西村豊成氏 (1942年10月経済学部入学、海軍)・秀村選三氏 (1942年10月経済学部入学、海軍)・森春光氏 (1942年10月経済学部入学、陸軍)・伊東一義氏 (1942年10月東大法学部入学、海軍) 聞き取り (京都大学大学文書館編『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書』第2巻、2006年、11頁)。
- 史料 2 常田滋弥氏 (1942年10月経済学部入学、海軍) 聞き取り (史料1に同じ、393頁)。
- 史料 3 和田稔 (1942年10月東京帝国大学法学部入学、海軍、回天訓練中殉職) 『わだつみのこえ消えることなく』筑摩書房、1967年、69頁。
- 史料 4 藤森耕介 (1942年10月法学部入学、海軍) 『ある学徒出陣の記録 兵科予備学生』日経事業出版社、1989年、11頁。
- 史料 5 『頼原退蔵日記』1943年10月15日条 (京都大学大学文書館所蔵)。
- 史料 6 近藤春昭氏 (1942年4月経済学部入学、陸軍) 聞き取り (史料1に同じ、305頁)。
- 史料 7 林尹夫 (1942年10月文学部入学、海軍、戦死) 『わがいのち月明に燃ゆ』筑摩書房、1993年、123頁。
- 史料 8 史料1に同じ、12頁。
- 史料 9 史料7に同じ、295頁。
- 史料10 佐々木八郎 (1942年4月東京帝国大学経済学部入学、海軍、特攻死) 『青春の遺書』昭和出版、1981年、364頁。
- 史料11 ヴィットコップ編・高橋健二訳『ドイツ戦歿学生の手紙』岩波書店、1938年、18頁。
- 史料12 和田良信 (1942年4月東京帝国大学法学部入学、海軍) 『白線と短剣』昭和出版、1975年、134頁。
- 史料13 吉田満 (1942年4月東京帝国大学法学部入学、海軍) 「戦没学徒の遺産」(「学徒出陣」25周年記念手記出版会『昭和十八年十二月一日』若樹書房、20頁)。
- 史料14 尾藤正英「懐疑と彷徨」(東大十八史会編『学徒出陣の記録 あるグループの戦争体験』中央公論社、1968年、57頁)。
- 史料15 史料10に同じ、397頁。
- 史料16 林市造 (1942年10月経済学部入学、海軍、特攻死) 日記 (加賀博子編『日なり楯なり』権歌書房、1995年、25頁)。
- 史料17 島尾敏雄 (1943年9月九州帝国大学法文学部卒業、海軍)・吉田満『対談 特攻体験と戦後』中央公論社、1978年、45頁。
- 史料18 渡邊直己 (1930年3月広島高等師範学校卒業、陸軍、戦死) 短歌 (日本戦没学生記念会編『新版 第二集きけわだつみのこえ』岩波書店、2003年、92頁)。
- 史料19 江畑稔 (1936年3月東京帝国大学卒業、陸軍、戦死) 日記 (旧制静岡戦没者遺稿集編集委員会編『地のさざめごと 旧制静岡高等学校戦没者遺稿集』1966年、43頁)。
- 史料20 熊取正光氏 (1944年10月経済学部入学、陸軍) 聞き取り (史料1に同じ、34・36頁)。
- 史料21 矢倉芳男「下からみた学徒兵」(「学徒出陣」25周年記念手記出版会編『昭和十八年十二月一日一戦中派の再証言』若樹書房、1969年、146頁)。
- 参考 1 森岡清美『決死の世代と遺書』補訂版、吉川弘文館、1993年、204頁。

史料1

西山 それでは、みなさんと戦争との関わりの方へ話を移させていただきます。学徒出陣の決まる以前、学生生活の中で戦争、軍隊、兵役というものについてどういふ見方をしていたかということをお願いいたします。

西村 戦争が始まったのが一六年ですね、そして一七年に入學。我がが大学に入った頃はもう形勢が逆転していたんですね。最初の半年だけ日本が優勢だったですけど。一七年の六月にミッドウェーの海戦で日本が敗北して、形勢逆転しました。一八年に入ったらもう完全に劣勢でしたね。僕の記憶では一八年に入ってから同宿の学生達といろいろ話している時に、もうこの戦争は勝つのは無理じゃないか、負けるか、喰い下がって引き分けに持ち込むか、どちらかじゃないかと言っていましたね。かなり情勢は悪かった。だけど、日常の行動でそれを意識したかという点、あまり意識はしなかったです。自由にものをしやべったり、行動したり、勉強もしました。実際学徒出陣が決まってですよ、切実になったのは。それまではのんきというのかな、日本は負けるかもしれないと思っただけで、自分が兵隊に行くとは。いずれは行かないかとは思ってました。卒業したら、徴兵延期が停止になって、ああ来るべきものが来たなという感じでしたね。初めて深刻に受け止めました。

西山 その形勢の逆転、ミッドウェーの話とか、当時から情報は伝わっていたんでしょうか。

西村 同じ下宿に、海軍士官の父親をもつ京大生がいて、そのルートでわかってきましたね。秀村 転進という言葉がね。退却ですよ。それになんとなく噂として伝わってききましたね。ガダルカナルの時なんかは、母が言っていましたけれど、福岡にすこい数の遺骨が帰ってきたんですね。駅から連隊まで数キロあるのですが、兵隊さんが白い遺骨の包みを胸に抱いてずつと涙い数回いて母は足が震えたと言っていました。それ以後遺骨の風潮はなくなりませんでしたね。西村君が言うように、悪いらしいなどというはあるけれど、またイタリアの無条件降伏などあったが、まさか負けるとは思われないし、どうなるのかなというはあるけれど、まだ切実じゃなかった。自分が行くんじやないんだから。

史料2

西山 それで、一八年の九月に徴兵延期停止ということになるわけですけども、その知らせを聞かれた状況をお話しいただけますでしょうか。

常田 それを聞いたのは九月の三日だったと思います。友人を訪ねて本郷に行った時です。

西山 東大の方ですか。

常田 そうです。三高の同窓生です。下宿で二人でしゃべっていたらもう二人やってきて、結局四人になったんですが、そこでニュースを聞いたわけです。西山 それは直接ラジオから聞かれたんですか。

常田 ラジオだったか何だったか忘れちゃった。それでいよいよ来たかとなったわけです。その時四人で何をしゃべったか忘れちゃったけれど、大いに議論したように思います。

西山 突然という印象ではなかったですか。

常田 いずれ行かねばならぬという気はあったんです。その頃の日記を見ると「これで肩身が広くなった」と書いてあります。当時若い人達がどんどん戦場に歩いて行っているのにならぬ残っているという点に、何か肩身の狭いものを感じていたと思います。

西山 そうすると、知らせ自体は突然かもしれないけれども、心構えというものはある程度あったということでしょうか。

常田 心の何処かにあったと思います。

史料3

九月二十三日(一九四三年)

恐れながら待っていたものがとうとう来たという感じだった。法文科系統徴兵猶予停止案。さばさばした気もした。だが一つの仕事に区切りをつけることすらもできずに、今までの二十余年の生涯をうつろいすこせせてしまったことには言いしれぬ淋しさを感じる。私は私の精神のかたまりを、たとえ幼くともある形で死後にのこしたいと思った。それは、たとえ国家へ捧げる死ということにおいて、いかに究極の目的が一致していることとはいえ、たしかに国家の現に私に直接要求している道からみれば、ある迂路をたどりつつある私にとって、それは大層に大変なことであると思う。国が今、私に求めている私の頭と、本来毎日をすごしている私のそれとはいささかことなる部分に属するからだ。

学校はわりに静かだった。正門前の新聞屋には、いつも屋頂まで死ね残る朝刊が、八時というのにすつかり売られて、そのまわりにただ銀香の夷が一杯にふみつぶざされてあった。

行政法に少し遅れた。二時間目は南原先生の政治学史だった。うしろで立って聞いた。早口で政治の哲学性について語られ、また真の人格は今日のごときいわゆる生命哲学や訓練で求められうるものではなく、ある真理への久遠の追求過程のうちに卒然として自らに見出される、というようなことを言われた。私は、けさ、さばさばしたとさういうなりに自分に無責任であり、卑劣だったと思つた。

史料4

昭和十八年十月十一日(月)

新学年が始まり、二回生として初登校口。新入生の新しい角帽が新鮮だ。

(中略)

昼休みの十二時半、第一教室に法学部全員が集合。渡辺法学部長から、文部省通達に基づく当学としての緊急臨時措置の発表があった。即ち「入営を前にして、我らのとらんとする道が二つある。一は一層充実した講義を続行し、せめて学園にある限り、でき得る最大限の勉学を進めること。他は勉学の一部を削いで、身体を頑健に鍛え、入営後に備えることである。今回とられる措置は、文部当局の指示もあり後者に重きを置く。即ち、学生として修めるべき講義は午前中に集約し、午後は鍛練と教練に充てる。教練は一週間に六時間、他の時間は総て行軍とし、これが指揮は帰還軍人たる教授、助教が当たる。これを本日から実施する」と。部長は続いて「もとより諸君は国家非常の時に臨み、愛国の情に燃えて軍務に服し、生還は期さないのでありましようが、私は諸君が一人も欠けることなく、一口も早く、この教室へ再び帰って下さらんことを、切に祈るものであります」と結んだ。

渡辺教授の話は事の重大さと深刻な事態に緊張し、声を震わせて一語一語を慎重に選んで語りかけ、千余名の学生は反感の思いでこれを嘯みしめた。

(中略)

三時半から第一教室で特別講義。こうした特別講義や行事が今後週三回程度催される。本日は朝日新聞記者で海軍報道班員の「南太平洋の決戦」、次いで大本営海軍報道部主計中尉の「学徒総決起の秋」と題する講演。この中尉は、新聞等で我々が全く知らされていない、驚くべき事実を語った。即ち「アメリカは、開戦以来一年半で軍需生産体制を急速に充実させ、特に航空機の生産力は日覚ましく向上した。大学生は続々と空軍に志願し、搭乗員となつていく。これに対し我が国は特に航空機の生産が上がらず消耗は急で、補給にも事欠いている。加えて優秀な搭乗員が次々と犠牲になり、戦力に大きく影響している。これが現在南太平洋ソロモン海域で我が劣勢の主因である。戦局は新聞報道とは大分異なり、第一線では制空権を米軍に奪われ彼の跳梁に任せ、我が軍がいかに悲惨な状態にさらされているか、想像を絶するものがある。国内体制を急速に整えよ。遊休労働力を総動員して生産戦列に就かしめよ」と行政面の立ち遅れをつき、「戦局の緊迫は世上の認識を遙かに超え、戦は今明年中に決するであろう」として我々の奮起を促す。

夕口が教室の窓を赤く染めて暮れてゆき、公場の通路までぎつしり埋めた二千名の学生は、初めて知らされた戦局の重大さに暗澹とした思いに閉ざされた。特に出征を匂口に控えた我々文科系の学生は切迫した身近な問題として一層深刻に受け止めながら、黙々と散って行った。

史料5

十月十五日(一九四三年)

京大講義始まる。学生は案外に多く教室は満員の盛況である。国文以外の学生まで来て居るらしい。興に乗じて二時間正味しゃべったので労れた。そして午後は又谷人である。こゝも学生は多かつた。やはり学生たちは少しでも多く講義を聞かうといふ心理になつてゐるらしい。(中略)五時から学生集会所で新入生歓迎会あり。新入生殆ど全部出席してゐた。先輩も割に多かつた。

史料6

西山 ちょうど今のお話に関係してなんですけれども、高等学校の二在学中にアメリカやイギリスとの戦争が始まるわけですね。その戦争の大きな流れを當時どんなふうにとらえていたか、どう思っていましたか。

近藤 そういふのは新聞も読んでいますし、ラジオでも言いますし、それから今お話ししたように、二・二六事件とか国際連盟脱退とかそういうことが次々起こっていて、要するにABC D包圍陣と当時言っていましたけど、石油なんかを禁輸されたし、そういう情勢がどんどん進んでいきましたから。例えば僕なんかも、要するに高校へ行つて、そうやって自分自身としてはわりにはびりして、もうどうせ何となしに、人に言われなくても、我々の将来はどうせ兵隊に行つて、お国のために死ぬのだというそういう思想がありましたね。前提として、それから逃れようとかそういう気持ちじゃなくて、もうそういう大きな運命の中に、子どもとときからそういう戦時色が強い世代でしたから、だからそういう流れで、いずれ大学を出れば兵隊へ行つて死ぬということになるのだなというふうなことを何となしに頭の中に考えていました。

史料7

十月十二日(一九四一年)

国家、それは強力な支配権力の実体である。それを無視し、この点から遊離して論じてはならない。ぼくは、もはや日本を讃美すること、それすらできないのだ。むしろ無用にして有害な感傷として排除したい。

戦争は、国体擁護のためではない。そうではなくして、日本の基本的性格と、そのあり方が、日本という国家に、戦争を不可欠な要素たらしめているのだ。現実には、日本が戦争を要求している事実こそ、戦争への道なのだ。ぼくらは、この戦争に耐えねばならぬ。そして根本的に日本の国家をよくしよう。それは、日本の人間そのものをよくし、発展させるために、もっとも効果的な方法なのだ。

だが、ぼくは、この戦争で死ぬことが、我ら世代の宿命として受けとらねばならぬような気がする。根本的な問題について、ぼくらは発言し、批判し、是非を論じ、そして決然たる態度で行動する。そういう自主性を実践性を刺戟されたままの状況で戦場にでねばならぬためである。だから宿命と言うのだ。

戦争で死ぬことを、国家の、かかる要求のなかで死ぬことを、讃えたいとは思わぬ。その、あまりにもひどい悲劇のゆえに。

ああ、すべては宿命だ。その宿命を世代としてにないながら、努力しながら、しかも之に抵抗しなければならぬ矛盾のなかに、われら、人の子の悲しき定めがあるのだ。感情は恐ろしい。だが、理性に従わねばならぬのだ。精神が歪んではならない。

我が心の生きるまで、友人を真実こめて愛しよう。

史料8

西山 出陣前の学生時代の戦争に対する認識ですけど、森さんはいかがでしたか。

森 今三人が言ったのと同じですね。戦争に対する危機感らしいものはだんだん肌を感じてはいるんですが、しかし、土壇場という感じではないんです。九割は無頓着でした。自分たちが戦争に行くチャンスだという感じはなかったですね。ある日突然、ラジオ放送で学徒徴兵猶予取り消して、えっという感じですよ。そこで初めて覚悟を決めたんです。一八年の九月の終わりだったと思うんですが、東条(英機)さんのラジオ放送が。友達と二人で一緒に京都から福岡に夜行で帰って、朝着いたら親父さんから、「おい、ラジオ放送があったよ。徴兵猶予停止だ」というんです。ラジオ放送があるまでは、切迫感はなかったんです。同時に、当時ばかな戦争をしたというのは全然わかってないし、ただあるのは困難だということ。困難に対しては、俺たちは身を呈して戦うぞという、それだけですね。大部分同じ気持ちだったんじゃないでしょうか。どんなのんびりした人でもまず九九%そうだったと思いますよ。今とは大分違いますよ、国を守るという点に対する意識は。

秀村 国を守るというよりは、軍隊に入つてから後に死ぬかもしれないという時に非常に出てくるのは、国家というよりも山河の美しい日本、ふるさとのためなら死んでよい。天皇のために死ぬというよりは、愛する人のためには死んでいいんだ、というのは本当にお互いに話し合ったことですね。幼い子供たちと遊んでいると痛切に感じましたね。当時若者の気持ちはほとんどそれじゃなかったか。

七月一日(一九四四年)

しかしおれは、軍隊に奉仕するものではない。おれは現代に生きる苦悩のために働らく。そしておれは、よき軍人になるために生きるのではない。その点におれは、僅かな白山意志の途を見出すのだ。

おれは、軍隊に入って国のためという感情をよびさまされたことは、軍人諸君を通じてどうかぎり皆無である。ただF先生のお便りや、身近ななにかにより、国民が直面する苦悩を反省させられて、おれは軍隊とか、あるいは、構構的にみた日本の国のためでなく、日本人々のために、
・・・いな、これも嘘だ。おれが血肉をわけた愛しき人々と、美しい京都のために、闘おうとする感情がおこる。
つまらぬ、とも、わけが判らぬ、とも、人は言うがよい。

おれはただ、全体のために生きるのではないのだ。全体がその生命を得ぬと、個人の生命がまっとうできぬがゆえに、おれは生きるのだ。この意味で、おれの日本観は、純粹でないと言えるかもしれぬ。

しかしおれは、架空の日本観よりは、たとえ利己的なりといえ、少数の敬愛する人々のために生きるのだ、と書いていた。

おれは抽象や観念に生きる人間ではない。おれは直接おれの胸にグンときて把握しうるもののために生きるのだ。

おれはくだらぬ哲学者ではない。おれは歴史家だ。文学青年だ。そして市井の一人だ。
それらしく生きれば可なり!ではないか。

史料10
六月十一日(一九四三年)

先口、大内君から便りがあった。農民の間であつて新しい生活を築き上げておられる苦衷、どうも大変な努力をしておられるようだ。しかし歴史観についてはどうも大内氏の考えに賛成できない。仮に、生産力^レによって歴史が個人とはなれて進行するとしても、個人は大内氏の言うように電車の中の人間でありアトムであるとしても、我々そのアトムの一粒たるものは、アトムとしての生き方を研究して、アトムとしての義務に殉じなければウソだ。社会主義の世界が何等かの形で出来上がると予言するのが経済学ではない。それを作りあげることが使命なのである。現在徐々に新しきエトスの形成されつつあるのを見逃してはならぬと思う。正しきものさえ育てあげればそれでいいのである。

そして大内君は僕が戦死することなど考えてはならぬといふ。自分の任務でない所で死ぬのはヒロイズムか一時の感激である。そんなのは愚かしきことだといふ。また反動的な任務に死ぬのはいやだし、そんな死に方をした者に感心もせぬといふ。白虎隊や新撰組には感心しないのだと思う。しかし僕は戦の庭に出ることも自分に与えられた光榮ある任務であると思つてゐる。現下の日本に生きる青年としてこの世界史の創造の機会に参画できることは光榮の至りであると思う。我々は死物狂いで与えられた任務としての経済学を研究して来た。この道を自ら選んだ義務であるからだ。その上、体力に恵まれ、活動能力を人並み以上に授かった自分として、身を国のために捧げ得る幸福なる義務をも有しているのだ。二つながらに崇高な任務であると思う。戦の性格が反動であるか否かは知らぬ。ただ義務や責任は課せられるのであり、それを果たすことのみが我々の目標なのである。全力を尽くしたいと思う。反動であるうとなかろうと、人として最も美しく、崇高な努力の中に死にたいと思う。白虎隊は反動的なものであつたかも知れない。しかし彼等の死は崇高である。美の極致である。形に捉われることを僕は欲しない。後世史家に偉いと呼ばれることも望まない。名もなき民として、自分の義務と責任に生き、そして死するのみである。

駕見敏郎——既出。学徒出陣組の大阪南大生海軍士官。二三歳。翌四五年四月特攻出撃により南西諸島方面で戦死。前年九月、鹿児島県出水航空隊での訓練を終えて朝鮮の元山航空隊に移動する直前の(母をて)書簡に「同期八一人」

要スルニ私達ノ求メテイタノハ、学問ノ出来不出来、テニスノ上手下手トイウ結果デナク、ソノ過程ニオケル真摯ナ努力デアリ、人間ノ全能ノ発揮デシタ。

イヨイヨ学徒出陣ノ令下リ、私ノ環境ハ家郷ヲ捨テ、銃ヲ執ル身ニ置カレマシタ。躊躇ナク私ハ、海軍航空隊ノ道ヲ選ンダノデス。環境ハ変レド、私ノ生き方ニ変リアリマセン。

飛行機操縦ハ、カタ奇勲峻烈ナモノデス。……ダカラ外形上最も奇烈ナ訓練、……専実苦シイ訓練ガ、苦シクアリマセン。客観的ニ見タテ平和安楽ナ生活ガ、突ハ情氣ト苦肉ト波瀾ノ絶ニ間ナイ生活デアッタリ、外見ハ苦難

辛苦ノ連続セル生活ガ、突ハ落着キ冷靜豊カナ「大安心ノ道」デアルトハ、充分御存知ノコト思イマス。

駕見は、学生時代には実務的な履修科目よりも理論的なものに関心を集中し、またテニスの選手として練習に精を出したが、出来不出来とか上手下手といった結果よりも、過程において最善の努力をしたかどうかを、重視した。つまり、置かれた立場で自己の能力の最善を尽くすことを学生時代以来追求し、海軍飛行予備学生としても、「婆娑時代ノ生活ト何ラ異ナリマセン」態度で、厳しい訓練を何の苦痛もなく受け入れたのである。彼は、「主体的役割人間」であった。

役割人間とは、倫理的満足や役割の遂行に見出す(と観察される)人々を指す。これには習俗的と主体的との区別がある。習俗的役割人間は、現行の習俗化した社会規範にしたがって役割を把握し、その遂行に倫理的満足を見出すのに対し、主体的役割人間は、自らの状況規定により役割を取得して、その遂行に倫理的満足を見出す。新しい状況、例えば戦時下の国家的要請に積極的に応じやすいのは、習俗的役割人間よりも、主体的役割人間である。それゆゑ、主体的役割人間は戦時体制に順応しやすい、かつ首尾よい順応のなかで一層その純度を高めるといつてよいであろう。戦時下の教育と訓練は、このような特性をもつ若者を多数育成する適合的な環境を構成した。

史料11

さて一つ、この前の御手紙の二三の箇所によるとお母様が多分誤解してゐられることがありますので、それについて書きたいと思ひます。それは僕が志願兵を願ひ出た動機です。もちろん戦争に對する世間一般の感傷からではありません。深山の人間を射殺したり、またその他のごとで武勳をたてるのを特別に偉大な行為だと考へるからでもありません。それどころか僕は戦争を非常に悲しむべきことと思つてゐます。今度も巧妙な外交によつて戦争を避けることが出来た筈だと思つてゐます。しかし、ひとたび宣戦が布告された今となつては、自分の運命を國民全體の運命と出来るだけ密接に結びつけるために全體國民の一員であるとの自覺を持つのは、當然のことと思ひます。僕は戦時よりも平時に祖國と國民のためにより多く役立つを得ると確信はしてゐますが、今更そのやうな慎重なほどとど打算のためにより多く役立つを得ると確信はしてゐますが、今更そのやうな慎重なほどとど打算的な觀察を行ふことは、間違つたことと思ひます。それは、弱れかゝつてゐる人を助けようとするものが、助けるに先立つて、弱れかゝつてゐる人間は何者だらう、自分の方がこの男より値打がありはしないかと、熟慮するやうなものです。——何故なら、重大なのは犠牲的精神であつて、何のために犠牲が捧げられるかといふことではありません。

史料12

(海兵團入団後)

夕食のあとに休憩時間に、採用のことについて色々話した。私たちが三十分隊の者は、予備学生に採用されるであろうことは信じて疑わなかつたので、数少ない主計見習尉官に何人採用されるかといふことに話が集中した。法・前・経の各学部に進んだ者は、兵科予備学生と主計見習尉官の両方に願書提出することが出来、この願書提出は入団して間もなく行われ、私も三十分隊に編入される前に既に提出済みであつた。

「そうさなあ、この班で四人主計に行くとなると、まず豊原、山口、下条、上居くらいかなあ」と誰かが云つた。

「いや、俺は主計には行かぬ。第一、俺は主計には願書を出してゐないのだ」

この始めて聞く豊原(令雄)の言葉に私たちは仰天した。彼は唯一つ、飛行専修予備学生を志願したといふ。

「豊原、なぜ主計にも出さなかつたのだ」

「今からでも分隊長に相談してみよう」

彼は頑として受けつけようとはしなかつた。しかし「主計に行きたい者は行けばよい。俺はいま帝國海軍が最も必要とする者に成るのだ」

と云ひ切つた。私たちは何か云おうとしたが、とつさには言葉も出さずおし黙つた。小倉中学創立以来と云われる秀才をムザムザ死地に追いやりたくないという気持は無論あつた。しかし同時に、少しでも易きにつこうとする気持が私たちに有つたからであらう。すつくと立つ豊原の颯爽たる英姿からは、まるで熱線がほとばしるようであつた。

史料13

学徒兵のほとんどが、戦争そのものに対して根源的な疑問を持ち、そのために殉じなければならぬ矛盾に最後まで苦しめ抜いたことは、彼らの書き残した言葉を一貫して読み通せばおのずから明らかである。特にある断章と、次の断章との間に横たわる長い空白は、彼らの苦悩の足取りを暗示している場合が多い。そのような苦悩の果てに、自分たちが青年以外には身を捨てて国を守る者がありえないという現状認識を通して、ついに必然的な「一兵士としての死」を受入れるに至るまでに、どれほど耐え難い内心のたぐひがあつたことか。虚心の読者は、生命への執着のかげさえもないように見える独自の行間に、断腸の想いがこめられてゐるのを探り当ててであらう。

今の時代からみれば信じ難いような彼らの自己保身の拙さは、どこから来るのか。青年はもともと実利には寡欲なものだし、また時代の風潮が、ただ欲求を充たそうとする衝動を軽んじたことの反映だ、などと言つてみても十分ではない。

保身の武器もなく徒手空拳で立つた彼らの姿には、他の時代の青年にない一つの支えがあるように見える。それは、自分に課せられたものに対する打算のない誠実さ、与えられた役割を謙虚に受け入れ、利害をはなれて最善をつくし悔いを残すまいとする忠実さ、とでもいえようか。一わがいのち月明に燃ゆ」によつて文名の高い林尹夫の表現によれば、われわれ学徒兵が軍隊生活の逆境の中で求めたものは、学生時代から貫いてきた「誠実な、偽りのない、全体的に自己のものに統一された生」であり、「精神の王国」だけは手放すまいとする意地であり、「自己向上の世界」を持ち続けようとする意欲であり、これらを要約すれば、「自己監視と自己超克との絶えざる努力」だったのである。

それが、彼らにとって最も強い支えとなつたのは、それ以上に頼りとなるよりどころを彼らが持ち合わせていなかったからに過ぎない。学生生活そのものから、読書から、また友人とのふれ合いから、学んだものは、その一点に集約された。それはまた、前の世代、すなわち戦前派の世代から引きついで最も高価な資産であつた。彼らは先輩から、人生をそのように生きるべく教えられたことを感謝していた。反面幸いにも、無責任な理想主義や賢明な処世術を学ばないまま、彼らにはなかつたのである。

よく聞かされて印象に残っている言葉に「淡泊であれ」というのがあった。つまり心の中に秘密を持つような意味であって、これが何より兵隊に要求される心がまえなのである。実際には淡泊であるばかりではだめで、いわゆる要領のよいことが兵隊生活には必要であるが、表面だけはどこまでも淡泊そうにふるまっていれば無難である。この淡泊ということに関連して、軍隊の中では世間よりも、忠君愛国とか天皇の大權威というようなお説教があまり聞かれないのも、新しい発見であった。兵隊としては与えられた任務を忠実に遂行してさえすればよいのである。その意味では学生のころ、目に見えない軍国主義にひとりて抵抗しているよりも、気分の上では楽な面があった。だいたい平均的な日本人の生活感情とは、このようなものであるのかもしれない。大局のところはあなたまかせにして、口々の職務に精根を尽す生き方である。軍隊生活は確かに苦しいけれども、商家の徒弟の生活などにしても、これと大した距たりがあるとは思われない。兵隊の釋しには庶民生活の苦しみとともに、ささやかな喜びもあった。今になって私はそれを貴重な体験であったと思う。私たちはエリートの特権も取りもなく、軍隊社会の最下級である初年兵になり切っていた。忙しかったりもあるが、戦局などにも皆あまり関心がなく、幹部候補生の最初の筆記試験に、マースヤル諸島の島の名前を三つ書けという問題が出て、私はたまたまそのころ（二月五日）クエゼリン、ルオット両島の守備隊が玉砕したことを聞きかじっていたので、それとマースヤル島の名を挙げておいたが、この問題ができた者はほとんどいなかったらしい。

〔中略〕

あとから考えてみると、教育期間が長かったために、実戦に参加して戦死した者は少なかったことになるが、そのころには長く生きたいとも生きられるとも思っていないからである。それは運命に随順するあきらめに近い気持であったが、それはやはりでもなかった。国や天皇のために死ぬという観念は、やはりまったく無意味とは思われず、戦死する兵士が天皇陛下と唱えるというの、たいていは作り話に違いないと考えていた。しかし戦争が与えられた運命であり、自己の家族をふくむ国民全体の生活を守るために役に立つのであれば、皆といっしょに戦って死ぬのもしかたがない、と漠然と考えていた。それは国家意識とはやや異なる、同胞意識ともいうべきものである。それは私はばかりでなく、多くの仲間に通じた気持であったように思う。直接には知らないが特攻隊に加わった者にしても、悠久の大義などを本心から信じていたのは少数で、大体は私たちと同じような気持で出撃して行ったのではないかと想像している。そしていわゆる戦中派に何か取柄があるとすれば、この国家主義から離れた同胞意識、あるいはエリート意識から離れた同志愛のようなものを、戦争のお蔭で強く自覚させられたところにあるのではないかと、とも今になって考えるのである。

十一月四日（一九四三年）

何といつても、僕も一個の人間にすぎない。ある時は天翔る口を思つて胸の高鳴るのを覚え、鍛えに鍛えた心身を思う存分奮つて闘う口を待ちこがれて、そこにこそ自分の働き場所、死に場所があると思うけれども、またある時は内地に残る理科の人達を羨み、或いは検査に洩れて残る人を、うまいことをした、と思ひ、主計や軍令部付になることを望んだり、結局地に惹かれる第二の魂の呼声にひきずられてしまうのだ。これは致し方ないことだと思ふ。そしてこの二つの魂は内に秘められているものであつて、外よりの何かの刺激に応じてそれぞれ時、所に従つて頭を擡げて来るのである。共に征く友と語り、自分の体に、頭にも自信をもつとき、また親戚まわりをして力づけられ、励まされ、或いは感謝されたりするときは、正に醜の御楯となつてこの人々を護りぬこうとの気魄に満ちて来る。また徴兵検査で、佐々木八郎、甲種合格、とよばれ、陸軍の人から海軍航空をやめてこつちに来い等と誘われると、自分一個のもつ意義というものを自覚してその知遇に報いよう、力の限り働こうと奮い立つのである。しかしまた、主計や軍令部付になるのは優秀な成績の者だと言われたり、才能もない輩が技術、医務課の用のために安全な所に残つて、しかもチャボヤされるのを見たりすると、我々の如きは彼等の以て名目とする、国家のために最も危険な所に置かれるのであると思ひ、かつて労働者が資本家に搾取されるとして労働を厭うた如き気分にも陥ることもあるのである。そして自分に航空適性があるといつて張り切る如きは全く馬鹿の骨頂だ、うまく二乙、三乙に連れ、主計、技術、医務等に残つて身を企う者こそ本心に利口なんだ、そう思うこともあるのである。一つの魂は天上に指向し、他の魂はやはり地上的なものに惹きつけられる。一日も早く入隊の口が来て、新しい仕事に全身を没頭させたい。つまらないことを考えさせられる口が早く過ぎればいいと思ふのだ。

二月二十三日

私達の命日は遅くとも三月一杯中になるらしい。死があんなに怖ろしかったのに、私達は既に与えられてしまった。

私は英雄でもなく、偉丈夫でもない。凡人である身には世のきつなと絶たれることが、耐えられなくなつてくる。私は遊びという遊びはやつたことがないけれど、遊びというものに対しては、未練はあつてもたいしたことではない。私の過去は少くとも私の環境は美しかった。それだけ私は夢をみて死ねる気がする。だけど、私の母のことを考えるときは、私は泣けて来て仕方がない。母が私をたよりにして、私一人を望みにして二十年の生活を闘つて来たことを考えると、私の母が才能のある人であり、美しい人であり、その半生の恵まれていた人であつただけ、半生の苦闘を考えると、私は私の生命の惜しさが、思われてならない。私もとても楽しい口を送りたかつた。

世の人はいろいろの想いをいうかもしれない。けれども母の悲しみのいやされることが、あるべき筈がない。戦死であつても子を失つたということに変わりはないのであるから。

私にとつては、死は心残りのすることであつても、行くべき道であり、私の心は敵戦場めがけての突込みには、満身の闘志にもやされるに違いない。

世の人にほめられる嬉しさもある。大君の辺に身を捧げた安心もあるに違いない。

けれども母にとつては私の死は最後までしかなないであろう。

母のことを考えると私は泣くより仕方がない。

しかし、若きもののふの戦に死ぬことは、子を失うこととは、全世界の人に与えられた試練である。私の母が悲しかりとも、世の人よりおくれた最後までこのころのものは思われぬ。必ず立直つてくれるであろうということが信じ得る。

それにもまして、私は私の母が信ずる神を信じているということは何という強味だろう。すべては神のみむねであると考えてくると私の心はのびやかになる。神は母に対しても私に対しても悪しくされるはずがない。私達一家への幸福は必ず与えられる。

私はいつか死んでも、いつか母と一緒にたのしく居ることを夢にみる。

残る世の人々が、きたなかるうとも（私が美しいとはいはしない。私に比較してというのである。それはあまりに、だいそれた、あつかましい思いかもしれないが）私は国の美しさを知っている。世人の幸福という渾たるものは私の胸を打たないけれども、祖国の榮えるということは、危急のときにあたつて私の必死のねがいである。

この国が汚い奴らにふみにじられるといふことは私にはたまらない。私は一死以つて、やはりどうしても敵を打たねばやきれない。

大君の辺に死ぬ願ひは正直の所まだ私の心からのものとはいひがたい。だが大君の辺に死ぬことは私にさだめられたことである。私はそれを、私はこの道をたどつて死にゆくことにより安心の境に入れることを、心から信じている。

吉田 二度と帰れないことを知って出撃する気持は、大変だったろうとよくいわれるんですけど、意外に平気なもので。出撃と決まりましてから、みんなわりあいつまらな

島尾 そういうことでしょね。
吉田 実態はどっか少しね、かりそめの、あれになつて

島尾 つまり、心中のいろんな思いはいいようがないですからね。だから公たつたって、やっぱり、オツというよう

吉田 そうですね。
島尾 オツと行って行き過ぎるとか、ちよつと微笑ん

吉田 まあ、そうですね。お互いというより、自分にもね。だいたい、まず自分に触れ合わない、触れ合おうとしないという感じがありますね。一方では自分の状況がよく分かってるんだけれども、片方ではそういうことに徹し切れない。だから救われているみたいなき

事もなく戦死者を語る現役将校に特異なる神経を思うたまゆら

風荒ぶ山西の野に今日もまた獣の如く闘いつづく
照準つけしままの姿勢に息絶えし少年もありき敵陣の中に頑強なる抵抗をせし敵陣に泥にまみれしリーダーがありぬ荒びたる感情に耐えて来たれども水清き故郷の山よ恋しきわが傍に来たりし兵が忽ちに肩射抜かれて血を噴き出しぬ耐えて来し心を今や粉々に砕きて獣の如く荒れたし
廻り来る戦の幻影に悩みついつしかわれも凶暴になりぬ

射抜かれし運転手をのせて夜の道を帰りつつ思う共匪の強さを

最後まで抵抗せしは色白き青年とその父親なりき
涙ぬぐいて逆襲し来る敵兵は髪長き広西学生軍なりき

四月三十日(一九四〇年)

野戦にくると実際殺伐になつて二一を殺すのも何とも思はなくなる。それに小銃と実砲を持つて居るものだから、所謂魔がさすというのか射撃したい衝動にかられるらしい。

昨日も兵隊が威嚇射撃をやつてもよいかといふので許容したら、二発目の弾が不幸に二一に命中して大声をあげて号泣し出した。可愛相だと思つたがもう一発射撃させて射殺した。東叻の部落民らしいが大隊本部に何か訴へて来るかも知れぬ。兵隊に処置させる前に妻子らしいものが泣きながら死骸引取りに来たといふ事だが余計な殺生をしたものだ。兵隊も虫けら一匹殺した位にしか思つて居ない。

西山 よく話に聞きますのは、古兵たちの私的制裁ですが、そういうことはあり

熊取 ありました、ありました。たまたまね、僕らが行つた中隊は、中隊長が中学の先生でした。オリンピックにもバスケットで出た人でした。その辺、心得ておつたから、最初、初年兵、要するに入つたばかりの奴をね、上等兵一人つけて一つのグループに固めてくれておつたんです。だから最初のうちは良かつたんです。ところが、三月の末でしたかね、実弾射撃、射撃の演習が連隊でありましてね、和歌山の浅海いうところまでね、実弾射撃に行つて、中隊の中で僕も一人、通信をやれということでした。有線通信を、それについて行つて来いというので、行つたんです。よその中隊の中に混

西山 それは、高校や大学のご出身だから特に厳しさを増すということはありませんか。
熊取 それはありましたね。後になつてからね。まあ、そういうのは一緒にやるんですけど、僕ら、特に狙われましたわ。第一、最初はね、やっぱり星一つでも増えたら、まして筋が一本入ったら、随分違うわけですよ。そやから、まあまあ真面目にやつてね、はよう、どうせ幹部候補生の試験に受かるか受からんか分からんけど、星はよう増えたら榮するわい思つてね、真面目にやつてお

つたんですけどね。くそ真面目に。だんだん馬鹿らしてなつてきましたね。ともかく、上の人が白と言へば、「それはそうや。鳥は白や。」いや、鳥は黒ですよ。「言つたらあかんわけですよ。ひと月でも、一日でも、先に軍隊に入つた人がね。これは上官ですよ。位は一緒でも、古い兵、古兵言ひましてね。それは、上官の命令つていうのは、天皇の命令なんです。だということになつてましたからね。それに反発するのね、やられるわけですよ。僕らは特に要領が良くなつたです。そんなんでやっぱりね、こんな無茶苦茶な世の中あるかいなと思ひ出した。態度に出てくるんでしょね。自分ではそういう気なかつたんやけども。やられましたわ。中にはね、一週、これ、茨城県へ行つてから

で、上等兵に呼ばれましてね、電線張りなんか工事してたおっさんです。けとね、やられながら、こんなやう知つてる奴おらんやなあと思つたんでしょね。「お前は京都大学やろ。経済学部やろ。」「そうです。」「河上藤の事件があつたのは、お前のどの学校のやろ。」「つて言つておつたんです。」「それが、河上藤の事件があつたのも、お前の学校やろ。」「そうです。」「それかと思つていたらね、「賈樟!そんな赤化した学校で教育を受けとるから、お前みたいな、反戦思想や反軍思想を持つような奴が出てくるんじやあ!」つて言つて、「つん、つん、顔がこんなに腫れる程ど」かれました(笑)。しかし、まあ、どつたか知らね、電線張りの工事したつた割には、よう知つとんやあと思つて感心しましたけど。というのにはね、「夜と霧」つていう本あるでしょ、ご存知でしょ。ナチスの収容所、あれ、僕は戦後読んで、思つたんです。あの中にも、要するに最初は自分がどつたかたらくさ思つしね、他の人がどつたかたらくさの毒にと思つたりね、いろいろ他の人にも同情する、そのうちに他の人が殴られたり殺されたりして、だんだん何とも思わんよよよになると、自分がどつたかたらくさ何とも思わんよよよになると書いてありましたけど、ね、全くその通りでした。軍隊で、最後は、殴られていても、なにくそと思わなかつたですね。軍隊というのはあれと一緒ですよ。

西山 八月一日のいわゆる玉音放送は、茨城でお聞きになつたわけですか。

熊取 ええ、茨城。僕は、たまたまそのときね、食事当番やつつたんですわ。それで、民家の庭ですけど、あの百姓家の、そこにテーブル置いて、食卓にしてましてね。そこで残つたんです。食事当番で、皆(放送を聞き)「行きよつたんですわ。まあ下士官なんかは、もうすでに、二、三日前から知つたようですよ。たまたま、僕、まだ皆帰つてきよれへんやあと思つていたら、将校が一人馬に乗つて走つて来ましてね、「おーい、熊取。戦争済んだぞ」つて言つたんです。その人はね、獣医少尉でね、うちの兄貴と和歌山中学で同級生やつた人でしてね。それが、わざわざ、僕のところへ知らせに来てくれたね。「おーい、熊取。戦争済んだぞ。お前、帰れるぞ」言つて。しばらく、ちよつとぼーとしてたけど、本当に嬉しかったですね。とにかく、今でもね、家内にも言つて、銀行の頭目にも言つたんですけど、僕の一生の、人生が一番嬉しかったのはあの時やつたんです。戦争済んだときです。やれやれ助かつた、また大学へ戻れるわと思つたんです。た、ちよつと心配したのは、シンガポールのね、さつきお話しした話を聞いていましたんでね。アメリカ軍が来たときに、大学、潰しよるんやあ、つてちよつとそれはね、心配しましたけど。まあ何にしても、軍隊もなくなるし楽になるわいっていうもんで、嬉しかったですね。助かつた。何せ、織田信長じゃないですけど、あの頭人生五〇年言つた頭ですからね。僕らはまだ半分来てないわけですよ。何で、これで、まあ天皇陛下のためやとか、国のためやとか言つてね、負けると分かつた戦に

駆り出されてね、死なんんねん、と。それは、もう兵隊行くとときから、私思ひました。ですから、さつきの猪木さんの話聞いてますからね、非常に不忠の兵隊でね、軍服の胸にね、いつもハンカチを入れておつたんです。(こゝろ、いざとなつたら、振つたらうと思つて(笑)。こんなのはおらんでしょう。(こゝろ、いざとなつたら、振つたらうと思つて)誰にも言つてなかつたんですけどね。いざとなつたら振つたらうと思つて。まあ、もちろんそうは言つても、大岡昇平の「俘虜記」やないですけど、ばつと敵兵と向かい合つたときにね、アメリカ軍に、やつと向かつて行くやろ、そこでさういうハンカチ振るだけの理性が働くかどうか、これはちよつと分からんけども、しかし、いすれにしても、一息間があればね、理性が働けばね、振つてやろうと思ひましてね、持つてました、ハンカチ一つ(笑)。まあ、見つかつたら、こゝろ、やられるとこゝろです。

どうも前置きが長すぎたようだ。要するに出陣学徒は、被害者への面だけが強調されすぎているように思うが、そのまた下で黙々と戦つた下士官兵がいるということもまた事実である。士官室内部ではいじめられたかも知れないが、一歩外へ出ればまぎれもない士官であったのだ。出陣学徒をみるときに忘れられてはならない二重構造である。

「中略」
「宝塚で接触したもう一人の出陣学徒は、私たちの分隊長として配属されて来たD少尉である。

そのころ神風特攻隊がはじめて出撃した。それについて、私たち練習生は異様な衝撃を受けた。もとより飛行機乗りとして戦争に参加するため、中学を中退してまで予科練を志願した私たちである。戦死は覚悟していた。だけど、出撃すれば必ず死ぬという戦法は、やはりショックだった。もちろんその戦法を頭から否定したわけではなく、いつほうで身のひきしまる思いをしたことも確かなんだけれど、そんなある日の夕方、兵舎の屋上に出てみると、D少尉が一人で遠くを眺めていた。私の姿をみて、微笑を浮かべながら話しかけて来た。

「君たちは心の底からの軍人になつては駄目だぞ」
私はその言葉にとまどつた。

「君たちも、そしておれも、いつかきつと学校へ帰る口が来るんだ。そのことを忘れるな。今は長い休暇中だと思ふんだ。今のうちにうんと体をきたえておくん。君たちが将来どんな学問をやるうとも、健康が大切だから」
私はキツネにつままれたような気がした。明けても辞れても、特攻隊に続け、ときたえあげられている私たちにどうして考えてもみなかつたことである。D少尉は私に話すよりも、むしろ、自分自身にいい聞かせているような表情だった。私は今でも、その時のD少尉の声をはつきりおぼえている。

「中略」
宝塚での教育を完了、高知へ移つた私たちはそこでまた何人かの出陣学徒に接触した。

予備学生出身のK少尉、海軍へ入つたのは私たちよりもあとである。軍隊では階級は絶対であるとはいふものの、ミソ汁の教つまり軍隊へ入つてからの経験年数も、またある程度の権威をもっている。とっさの判断の適否が生死を分けることになる戦場では、経験の積み重ねが大きくモノをいうことになるからでもあろう。

課業の合い間に、少尉を開んでムタ話をしていた私たちは、たまたまそのことを話題にした。「階級は下でも、経験では私たちの方が上だ」ということを、実に速回しに話した。その時、K少尉は顔をこわばらせてどなつた。

「お前たちとは頭が違うんだ。くやしかつたら上級学校へ入つてみる。中学も卒業出来なかつたやつらが何をいふんだ」――この一言が私たちの心に深く突き刺さつた。あのころ、私たちの大半は、あわてて予科練へ入つたことを後悔する気持ちをどこかにもつていた。もう半年か一年中学において、上級学校へ入つてから海軍へ志願すれば、いきなり短剣が吊れたものを……。何も中学をおつぱり出されたわけではない。そうすることがお国のためだと信じて、中学の途中で志願したのだ。そうしたいのを知つてか知らずか、少尉は顔をこわばらせたまま、私たちのそばを離れて行つた。

[資料3]

「出征する学生たち - 「学徒出陣」 - (2)」への受講生のコメント (2016年度)

戦時中の国民は日本の劣勢を全く知らなかったと思っていたので、学生たちが戦局の悪さを自覚した上で、それでも戦争に行かない自らの肩身が狭いと感じていたことに驚きました。戦争に行くと死ぬということをプラスに捉える(国を讃える)でもなくマイナスに捉える(逃げ出したり、悲観したりする)でもなく、「運命」「宿命」として受け入れていた学生たちの感覚は今の私たちの感覚とは到底近くないものだけれど、人格形成期に戦争が拡大していくのを目の当たりにして育ったことを考慮すると少し納得できるように感じました。教育学部生の自分としては、戦争に染まった時代に育った学生たちの価値観はとても興味深く、育った環境の精神への影響の大きさをよく表している例といえると思いました。学生たちが戦争に出征しその多くが死んでいった事実はもちろん非常に悲しいことですが、無批判に天皇を礼賛し国のために命を捧げたわけではなく、彼らなりに様々な議論、思考を重ね、ある種のポリシーや覚悟を持って入隊したということは、残された者や未来に生きる私たちにとって少し救いになるような気がします。しかし、結局のところ戦時中の既存の価値観から逃れることができている点には悲劇的だと思います。戦時の学生たちのことを思うとやりきれない気持ちになります、もしかしたら未来の人々から見たら現在の私たちの価値観も信じ難いものに思えるかもしれないという考えに至り、はっとさせられました。たかが一人の人間には不可能なのかもしれないけれど、出来る限りフラットな眼で現実を認識することが重要であると考えました。(教育学部、1回生)

日記から戦争をよしとはしないが、時代の流れとして戦争というものがあり、自分は無力でその流れに逆らうことができず、流れに身を任せるしかないやりきれなさが読み取れた。時代の流れに逆らうことができないのは今も同じことであり、再び戦争が起こってしまったら身を任せるしかないのかな、と思い、私もやりきれないおもいになった。国のために命を投げ出すという行為が評価されるべきことなのか、馬鹿げたことなのか、また自らの命を守ろうとすることが正しいことなのか、ひきょうなことなのか、どちらか決めることはむずかしいことであり、戦争を経験した人たちはこの葛藤に苦しんだのだろうと思った。しかし、その葛藤から逃れたいという気持ちからどちらかの意見に偏ることが解決策だとも思わない。どちらが正しい、まちがっているか決めつけず、考え続けることが大切なことだと思った。すごく重い話で気持ちが重くなったが、忘れてはならない重みを学んだ気がします。戦争はだめなものだ、二度と起こしてはならない悲惨なものだと教えることは簡単だと思うが、なぜだめなものなのか、どうしたら二度と起こすことがなくなるのか、もし再び起こってしまったときに自分はどのような行動をするべきなのか、それぞれ考える場を教育現場で与えることが戦後教育ということなのだと思った。(教育学部、1回生)

今日の授業で興味深いと思ったことは学徒兵たちが自分の戦う動機を、そろって自分のよく知る家族などを守ることにもっていたということだ。よく聞く戦争美化の話では当時の若者は国家の為に命を投げうつことのできた熱い心をもつものばかりだったと言われる。

だが実際に戦地に赴いた人、学徒兵たちの日記や学徒兵の様子をみていた人々の手記を読むと学徒兵たちのところがいかにゆれていたのかがよくわかり、なんのために戦うのかについては特に苦悩していたことがわかった。そしてそれを自分の身近な人を守ることに答えを見出したことは、今のぼくが考えても至極当然のことのように思える。少なくとも天皇陛下のため、国体のために戦うことよりは。

改めて思うのは学徒兵も、現代の我々とあまりかわらぬ若者なのだということだ。状況は大きく異なるが、それでも、今の私たちにも共感できる信念にもとづき行動している。そのことが今日の授業でわかった。(経済学部、1回生)

今回の講義にあった学徒兵の典型的な思想として、「外部から与えられた状況という条件の中で、主体的に自分の役割を選び実行する」というのがあった。これは確かに、自ら状況を変えようとはしなかったということを暗示するが、当時の戦争という状況は国家レベルの問題であって、学生が関与できるものではなかつただろうし、風潮もあつただろう。状況を自ら変えようという発想自体が不可能だったのだと思う。だから、この思想を持って戦地に赴いた兵は自らに尊厳を持って死ぬことができただろう。しかし、今回の講義に出てきた手記などの史料はほとんど全てが東大や京大出身の学生で、彼らは自らの人生について考えていた人である。全ての学生が自らの人生について考えたり、哲学を持って生きていたわけではなかつた。戦争に行かされ死んでいく自分の生の位置づけすらできないままの学生は多くいただろう。そういう学生たちはどう思っていたのかが気になるところだ。(経済学部、1回生)

非常に考えさせられる授業であつた。戦場にかり出される人達の生々しい、リアルな考えを多数目の当たりに出来、大変興味深かつた。この中で、特に思ったのは「俯瞰的に」歴史を見る、歴史の多様性を考えることは、戦時期を学ぶ上で非常に重要であるということだ (このことは教授もおっしゃっていたが)。教科書・映画・小説等で語られている「戦争」というのは、一種型どられ過ぎである。客観的を装ってはいるけれど、実際そんなことはなく、ただつながりや、利便性、物語性が出るようにつくりだされた「デッチ上げ」の歴史であると改めて認識した。事実、僕もこの授業に出るまでは割と「特攻兵は皆死ぬのが嫌だつた」とか「日本人は完全に洗脳されていたからバンザイ突撃の様なもののができたんだ」とかいった、世間的な、いわばステレオタイプの見方を強く持っていた。しかし、どうだろうか。そんなのは「一部の人」に過ぎなかつたのである。全く別の、ある意味現代的な考えを持っている人は当時にもいたし、同様、先述のようなステレオタイプの思想を持っていた人ももちろんいた。つまり、「戦時中の人々」を一くくりにすることは決してあつてはならない。僕は、色々な方面の人々の日記や手記をもっと読んでもっと知りたいと思つたし、歴史教育においても、その様な機会をもっと提供してもよいのではないかと思う。現代日本で「今の子供達は学ぶ意欲、知る意欲がない」と嘆かれるのは、そういうところに原因があるのではないかとさえ思われた。(農学部、1回生)

[資料4]

講義全体への受講生のコメント (2016年度)

今期の講義を通して、ずっと世代観というものが重要で、物事をより複雑にしているのだと思った。戦後は、2~3年の差であっても、考え方・情念がまるっきり違うということがあった。今後も、様々な問題に対して、この視点を通して見ていかなければならないだろう。また、世の中の事象は、様々な分野にまたがっており、安易に浅く語るのは間違っているということも意識された。学生運動も、教育学、心理学、経済学、などなど様々な視点から分析できるだろう。そう考えていくと、語り得るものがなくなっていってしまう気もするが、それでも、わだつみの声を見て泣くおばさまがたのように思考停止にはおちいらずに、京大生として、考え続けていきたい。(教育学部、1回生)

この講義を通じて、特に戦後の世代論、大学闘争の講義を通じて、多数だから、時流だからと安易に大きな流れに迎合するのではなく、少数派、自分とは異なる主張を持つ人たちのその背景についてまで知ろうとする努力が必要だと感じた。(経済学部、1回生)

4月からの講義を通して、過去の学生や大学のことについて、想像以上に深く学べた。「京大は伝統があるすばらしい大学ですよ」というような内容の授業は嫌だと思っていたが、そうでなかったのが本当によかった。自分をしっかり持って、充実した大学生活を送りたいと思っている。(経済学部、1回生)

正直最初はこの授業ではないものをとろうとしていて、抽選に落ちて単位を満たすためにとったので、あまり興味がありませんでした。実際にうけてみて、知らないことばかりを学べたし、今にはない違った価値観に多く触れることができて良かったです。

自分が予想していたのとは全く違った内容で少し驚きましたが、全体を通して興味深いと思うことは少なくなかったです。

ただ、京大の歴史なのに京大以外の話が多かったり (これは仕方ないとは思いますが)、資料を読むのが早すぎる点が少し問題があると思いました (上から目線ですみません)。(経済学部、1回生)

「京都大学の歴史」という名の講義でしたが、初めに教授が発言された通り、京都大学をたたえたり、京都大学のみ焦点をあてるのではなく、京大の歴史を通じて当時の社会情勢を知ったり、両者の比較をすることができました。また、毎回一つの事象に対して一方の側の意見のみを提示するのではなく、相対する意見や別の意見を示されたおかげで、今まで自分がもっていた印象や知識ががらりと変わることが多々ありました。そして、新聞やテレビ、人が言うことにただ納得するのではなく、様々な考えを沢山聞き、自分で考える大切さを改めて感じました。(経済学部、1回生)

4月や5月の初めの方の内容はあまり明確には覚えていませんが、京大の起源をたどる内

容で、入学した当初に自らの所属する大学の源流を知るといのは良い経験になったと思います。しかし、この講義の激動の戦前から戦中、戦後、高度成長のひずみへといった過程はそれにもまして興味のもてるテーマでした。日本史で少し学ぶ単なる出来事としてではなく、大学に焦点を置いて大量の史料を読むと当時の出来事が例えば大学生の手記からは生き生きと感じとることができて、これが大学での学びなのかと検証の大切さも学ぶことができました。(経済学部、1回生)

「京都大学の歴史」という授業では、物事を多面的にみることの重要性というのを学んだ。滝川事件は、私は教科書の端に書かれていて、単なる政府の自由主義の弾圧だと思っていたが、それには滝川の人間性だったりとか、というのが複雑にからみあっているのを知った。学生運動についても、他人事のようにコメント用紙に書いていたが、現在の自分の考え方とか、近年の反安倍政権のデモだとかを見て、一義的なモノの見方をしていないか反省しなければならぬ面があることを思い知らされた。その時代を占める一般的な風潮だったり世論というものがあるが、その世論を一度疑ってみる、自分の信じていたものを一度疑ってみるということは学問をする上でも、普通に生きていく上でも大切だと思ったから、実践できるように心がけていきたい。(経済学部、1回生)

第1回からこの授業を受けていたが一つ大きく思うことがあって、それは「歴史は断片的でなくつながっている」ということである。戦前の京都大学からやはり左翼的な運動は行われていたし、滝川事件もやはり後の京都大学の学生の思想に大きく影響を与えている。だとすれば、今、私のいる京都大学ともつながっているはずだし、つまり、今の我々も「京都大学の歴史」をつくっているのであると感じた。(農学部、1回生)

自校史教育と学修支援 －アーカイブズの立場から－

日本体育図書館協議会 第6回（2016年度）研修会

2017.1.20（於 日本体育大学）

西山 伸（京都大学大学文書館）

I 前提としての大学文書館



















